

トヨタ看護専門学校 2026年度 入学試験 問題 (国語)

受験番号
氏名

一次の文章は、多発性硬化症により一夜で視力を失った筆者(石井健介)の手記の一部である。これを読み、後の問いに答えよ。

とある音がきつかけとなり、とたんに思い出す光景がある。まるで音の泡、サウンドバブルが弾けた瞬間に、その中に閉じ込められていた記憶が香りのように広がっていく。

20代のころに働いていたアパレル会社のオフィスでは、東京のFMラジオ局であるJ-WAVEの番組が朝から晩まで流れていた。おしやれでかっこいいラジオ局といえばJ-WAVE、家でも車の中でも20年近く、僕は注1 81・3以外の電波など拾ったことがなかった。J-WAVEは注2 ジングルの種類が群を抜いて豊富だ。どれもこれも、あれもこれも、それはそれはかっこいいジングルばかりなのだが、そのなかのひとつが、僕にとってのサウンドバブルとなっている。

視力を失うちょうど1週間前、僕は恵比寿ガーデンプレイスにいた。坂本龍一さんが中心となり設立された commons というレーベルが a シュサイイするイベント「健康音楽」にて、ボディケアを提供するブースのセラピストとして参加していたのだ。J-WAVEがこのイベントの後援をしており、僕らのブースの目の前にある屋外公開スタジオからはずっと、あるジングルが流れてきていた。春の気持ちのいいお日さまの下、仲間たちとわいわいやりながらいい音楽を聴き、おいしいものを食べた記憶が、そこには閉じ込められている。

健康音楽から2週間後、病院のベッドの上でこのサウンドバブルが弾けた。公開収録された音源が『パラディーン』という番組内で放送され、春の日差しの中で聴いたあのジングルが流れたのだ。目の前に広がっていた光景を思い出しながら、<sup>①</sup>僕の涙も流れてきた。あのときはあの場所にいたのに、なぜ今はここにいるのだろうか？

パラディーンはほどなくして終了してしまい、おそらくこのジングルも、今ではほとんど使われることはないだろう。しかし時折あのときの記憶に触れたくなって、YouTubeに上がっているジングル集を探しにいつてしまう。それは昔の恋人が使っていた香水の香りを、たまにかぎたくなくなってしまうことにちよつと似ている。

もうひとつのサウンドバブル発生<sup>b</sup>、ソウチは、病室のベッドに取り付けられていた。ベッドサイドにあるボタンを押すと優雅なメロディが流れ、しばらくのち「石井さん、どうしました？」という看護師の声が聞こえてくる。

入院中、僕は何をするにもこのナースコールのボタンを押し、このメロディを聴かなければならなかった。特にトイレに行きたいとき、わざわざ看護師を呼んで付き添ってもらわなければならず、何もできない自分に対する情けなさと、忙しいのにわざわざ来てくれる看護師に対する申しわけなさが入り混じり、限界までトイレを我慢することもあった。さらに夜中は、同室のおじさんたちを起こしてしまわないかと、ボタンを押す指が逡巡<sup>しゅんじゆん</sup>した。

X、ボタンを押してメロディが流れれば、必ず誰かが来てケアをしてくれるという、安心感も覚えていた。反対色の絵の具を水に垂らしたときに生まれるようなマーブル模様<sup>d</sup>が、光の下で見るシャボン玉の膜のごとく、そのサウンドバブルを覆っていた。

退院して2年と少しが過ぎたころ、仕事の出張のために訪れた東京駅の東海道新幹線のホームで、このサウンドバブルが不意に弾けた。開閉するホームドアから、ナースコールのメロディが流れてきたのだ。一瞬、今の自分の居場所を見失い、うろたえる。座席に落ち着いたものの、新横浜あたりまではその<sup>c</sup>ヨインが続いていた。

病院のベッドの上で光も望みも失っていた僕が、3年の歳月を経て、こうしてまた出張のために新幹線に乗っている。トイレにすらひとりで行けなかったときに聴いていたメロディを、視力を失ってから初めて乗る新幹線で聴いたのだ。

<sup>②</sup>そのメロディは、僕の内側でこだまのように鳴り響いていた。

原稿を書くにあたり調べてみると、作曲者はテクラ・バダジェフスカというポーランドの女性ピアニストで、1851年に発表された「乙女の祈り」という曲が、このサウンドバブルの原曲だった。

光を持った<sup>d</sup>貴婦人、ランプを持った<sup>e</sup>淑女と呼ばれ、近代看護の発展に多大なる影響を与えたフローレンス・ナイチンゲールもまた、このテクラと同じ時代を生きた人のようだ。看護師<sup>h</sup>献身的な女性、という典型的なアンコンシャスバイアス(無意識な刷り込み)はいまだに根強く残っているが、<sup>③</sup>ナースコールに「乙女の祈り」が使われることこそ、その根強さの象徴なのだろうと想像してしまう。

とにかく当時の僕は、乙女たちに昼夜を問わず看護をしてもらっていた。彼女ら(ときどき彼ら)の祈りがあったからこそ、こうして今の僕がある。  
(石井健介『見えない世界で見えてきたこと』による)

注1 81・3……FMラジオ局 J-WAVE の周波数、81・3メガヘルツのこと。

注2 ジングル……テレビやラジオ番組の節目に使われる、数秒から数十秒程度の短い音楽や効果音のこと。

問一 傍線部 a～e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 傍線部①「僕の涙も流れてきた」とあるが、このときの「僕」の心情を説明するものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 今ではほとんど使われることはないおしゃれでかっこいいジングルを聞いて、『パラダイソン』という J-WAVE の番組を懐かしく思い、ジングル集を探しに行ってしまったくなっていく。
- イ 春の気持ちのいいお日さまの下、仲間たちとわいわいやりながらいい音楽を聴き、おいしいものを食べたときの光景と、現在の病院のベッドの上から見える光景があまりにも違うことに落胆している。
- ウ イベントの屋外公開スタジオからずっと聞こえていたジングルが、聞こえるはずのない病院のベッドの上で聞こえたため、自分の居場所を見失い、うろたえている。
- エ 病院のベッドの上でサウンドバブルが弾けたので、ボディケアを提供するセラピストとしては、今後イベントに参加することが叶わなくなったことに対し、悲哀の念を感じている。
- オ 「健康音楽」というイベントに参加し、目の前に広がっていた光景を鮮明に記憶しているにも関わらず、病院のベッドの上で光も望みも失っている自分を恥ずかしく思っている。

問三 X に入る言葉として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 例えば
- イ 一方で
- ウ 従って
- エ つまり
- オ だから

問四 傍線部②「そのメロディは、僕の内側でこだまのように鳴り響いていた」とあるが、「僕」にとって「そのメロディ」はどのようなものであつたか、本文に即し、三〇字程度で簡潔にまとめよ。

問五 傍線部③「ナースコールに「乙女の祈り」が使われることこそ、その根強さの象徴なのだろう」とあるが、これを説明した次の文の空欄 A～C に入る適当な語句を本文より抜き出し、答えよ。

「乙女の祈り」というタイトルの曲がナースコールに選ばれたのは、看護師が A であり、B にケアする存在として、C の姿が象徴的に重ね合わされているからだろうということ。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

看護師のふしぎな語り方について真つ正面から迫ったのが、『摘便とお花見』である。著者の村上靖彦さんはフランスで博士号を取ったのち、現象学者としてエマニュエル・レヴィナスの研究を続け、その後日本で最初に出した本が『自閉症の現象学』（勁草書房）だ。人の営みに繊細なセンサーを働かせる村上さんがその次に着目したのが、看護師の語りだった。

看護師の語りは「主語がはっきりしない」とか「話があつちに行ったりこつちに行ったりする」とか「事実なのか推測なのかわからない」などと、よく医者から批判されたりする。しかし村上さんはそれに強く反発する。

ケアの現場では、なかば憑依したような状態で「相手の中」に入らないと患者の感覚をつかめない。つまり、ケアはしばしば「主体と客体を分けたうえで何かを成す」というような近代的な設定の外で行われるのだ。だから主語がはっきりしないのは当然であり、したがって能動／受動が不明確なものも、時制があちこちに飛ぶのも、事実と推測が明確に区分されないのも、<sup>①</sup>ケアにおける現実を正確に反映した語りなのである。

ある意味では、主語も時制も一貫した語りというのは、たとえば手術室のように外部からのノイズが <sup>a</sup>シヤダンされ、主体と客体が明確に分離したままではいられない特殊な環境でこそ成立するものなのだ。

村上さんは、「看護師を主語」に <sup>b</sup>据えた質問をことごとく「患者を主語」に変換して答える C さんを紹介する。

C さんの動作を主語に据えた私の質問を、C さんは否定した。実は今までの引用でも何度か、私は C さんを主語に置いて彼女の行為を尋ねたのだが、C さんの回答は患者を主語に置き直していた「……」。C さんは常に患者の視点から思考しているがゆえに、知らず知らずのうちに私の質問をずらしてしまうのである。患者を見守るといふ〈外部〉からの視点を否定し、「患者さん自身がその人らしさを取り戻すまでは」と視点を患者の〈内部〉に置き直すのである。

（『摘便とお花見』二二二頁）

主語が容易に入れ替わるとは、自分と相手の境界線が溶けて一体化してしまうということだ。これは「注1 隔絶された自己」を旨とする近代的主体からすれば、ネガティブに評価されるしかない。

しかし逆に、自らのヤングケアラー体験を通して、「それなくしてケアなんてものはないのだ」と喝破したのが映像作家の中村佑子さんだ。『わたしが誰かわからない』で、まさにこのタイトルどおりケアをめぐる「自他の境界線」を考え抜いた末にこう結論づける。

ケアを成就できる主体というのは、あらかじめ固まることを禁じられ、環境によって変化する可塑性を持っているということではないか。自分をとりかこむ輪郭線をいつでも崩れさせ、自己と他者の境界を横断することができる。自己の固着という安心からいつでも離れられる無防備さというものが、ケアの主体の真価だろう。

(『わたしが誰かわからない』一五六・一五七頁)

この力強い「ケアの主体」宣言は、実際のリンショウの場ではどうあらわれるか。もういちど村上靖彦さんによる別の書『在宅無限大』から引いてみよう。

小児科看護師のFさんは、インタビューの最後、おもむろにむかし遊んだ築山の話をする。北海道育ちなので雪が降るとその上でスキーができるような山らしい。山のまん中に土管が埋め込まれていて、そこが子どもたちの基地になっている。Fさんがそこで待っていると、障害のある子のお母さんが「話聞いて」って土管に入ってくる。

そういうイメージで、私は大事な人の話を聞くときに、その土管の中に入ります。「…」入ってきたときに、土管の中って大きな声かけると、「わーっ」と散っちゃうんだけど。小さな声でささやくと、ちゃんと聞こえる。でも小さな声を聞こうとすると、一生懸命聞かなきゃいけない。そんなイメージを持って、その人をまず土管の中で待つし、お話を一生懸命聞くし。

(『在宅無限大』一七〇頁)

自他未分な一本の土管の中で囁くように咳けば、聞こえる声は自分の声なのか相手の声なのか。② こうした形でしか語れず聞けない話というものがあるだろう。

(白石正明『ケアと編集』より。出題の都合上、一部改変している。)

注1 隔絶された自己……他人からの影響を受けにくい、自立した人間が持つ自己のこと。

問一 傍線部a～eのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 傍線部①「ケアにおける現実を正確に反映した語り」とあるが、その特徴の説明として適当なものを、次の選択肢からすべて選べ。

- ア 主語がはっきりしない
- イ 視点を患者の〈内部〉に置き直す
- ウ 人の営みに繊細なセンサーを働かせる
- エ 事実なのか推測なのかわからない
- オ 環境によって変化する
- カ 患者を見守るという〈外部〉からの視点をもつ
- キ 話があっちに行ったりこっちに行ったりする
- ク 「自他の境界線」を考え抜く
- ケ 自己の固着という安心からいつでも離れられる
- コ 主体と客体を分けたうえで何かを成す

問三 傍線部②「こうした形でしか語れず聞けない話」とあるが、「こうした形」とはどのようなものか、説明せよ。